

ママと呼びなさい！

zonbitan

「ちょっと早く着きすぎたかな？」

とは言っても電車に乗って来たんだから早するという事はないのでは？

彩奈は高校卒業を期に母親の元を離れて15年ぶりとなる父親の所で一緒に暮らす事にした。母親の元から離れる理由は幾つかある。

その幾つかある理由の中で母親の元を離れる決心をする事になったのはこの事なのだろう

母は何年か前からある男性と交際をしているようなのだ  
娘の彩奈には心配をかけまいとしてか何も言わないのだが  
敏感な年頃の女性としてそれなりに感じ取ってしまうのである

自分がある事で母が気を使ってしまう事が彩奈には耐えられなかったのだ  
なので高校を卒業したら母親の元を離れて一人で暮らそうと1年ほど前から決めていた  
かといっていきなりのひとり暮らしでは母が許さないだろうと思い  
15年前に離婚した父親の方へ行くという事にしたのである

その事を母に告げると少し心配そうに話してくれた言葉がなぜか引っかかるのだ

「あの人はとても優しい人だけど・・・」

「だけど・・・？」

「あのね・・・あの人がちょっと変わった所があるのよ」

「変わったところ？」

「そうなの・・・あの人がって幽霊がね・・・見えるみたいなのよね」

両親が離婚した理由をハッキリと教えてもらったことはないのだが  
どうやらこの事が理由みたいなのである  
大の幽霊嫌いの母としてみればとても耐えられない事みたいなのである

彩奈の方は別に幽霊とかオカルトやホラーなどなんとも思わないし  
レンタルビデオなどでよくホラー物を借りてきて見ていると

その度に母に彩奈は父親に似てるって言われていたのだ  
ただ、父が幽霊が見えるという事はこの時初めて聞かされたのである  
しかしホラー好きの彩奈にしてみればそんな父に少しワクワクしてしまうのも事実である

駅の出口の左側の方にちょっとした公園みたいな所がある。  
木目のベンチが幾つか並んでいてその周りを木が何本か植えてある  
何人かの人がベンチに腰掛けていたり立ってお話をしている  
どうやら誰かと待ち合わせをしている人たちがその待ち合わせ場所になっているみたいだ  
彩奈も空いてるベンチに腰かけて待つことにした

ベンチに腰掛けて周りの景色を眺めていると向こうから数人の人が歩いてきた  
おそらくこれから電車に乗る人たちなのだろう  
その中に黒のミニスカートタイプのスーツの上に真っ赤なコートを羽織った女性に彩奈は目がいった  
彩奈にはキャリアウーマンか何かに見えたのだろう  
「きれいな人だな～」と思いながらぼんやりと真っ赤なコートの女性を見つめていた

## なんでそうなるの？・・・その2

---

近づいてくる人たちが彩奈の座っているベンチから  
少し離れた歩道を駅の出入り口の方へ通り過ぎていく  
当然、赤いコートの女性も通り過ぎていくものとばかり思って見ていたのだが  
赤いコートの女性はそこから離れて一人彩奈がいる方の広場の方へと歩いてきた

「この人も誰かと待ち合わせなのかな？」

黒のミニのスーツに真っ赤なコートに丸いメガネそしてセミロングのストレートの髪が少し赤みが  
かかっていて  
それが不思議な可愛らしさを映し出している  
彩奈の座っているベンチの二つ離れたベンチにその女性は腰掛けた  
彩奈の視線に気がついたらしく、可愛らしく微笑む彼女に彩奈は軽く会釈をして微笑んだ

そういえば私は父親の今の姿を知らないのよね？

彩奈が父親のところへ行くことを話したのは約2ヶ月ほど前の事で  
母親が父親にその事を電話で相談していたのは知っていたし  
彩奈自身も電話では父親と話をしたのだが・・・考えてみれば写真がないのである  
離婚したときに母親は父親の写っている写真を全部処分してしまっていたらしく  
今の父親どころか昔の父親の印象すら彩奈には分からないのである  
ただ・・・ぼんやりと記憶にあるのはなんとなく面白い人・・・というくらいなのだ

母親から聞いた父親の印象は体型は少しやせ型で背もそれほど高くはなく  
どこにでもいるような感じのスタイルの男性だったのだが  
それだけではなんの事やら彩奈には意味不明だったので  
なにか印象に残っている格好とか仕草とかってないのか？と聞いてみたら  
花親が一言・・・「カッコいい人よ」・・・いや・・・それでは何も解決しないような・・・  
もう少し分かりやすく教えてと言うと母親は変な一言を口にした

「あの人って目立つのよね・・・」

あはは！・・・って・・・

それじゃなんにも分からないっちゅ===の！

「ま～悪い人じゃないから会えば分かるわよ」

そんな母親の言葉にこれ以上聞いても意味がないので「会えば分かるわよ」の母親の言葉でとりあえずは納得する事にしたのだった。

とりあえず携帯から電話してみればその電話を受けたのが父親という事になるわけだからという事を思い出して彩奈はバックから携帯電話を取り出した

彩奈の座ってるベンチがある広場には10人程の人が誰かと待ち合わせしている  
そして駅の歩道にもそれなりに人が歩いていたりバスを待っていたりという感じである

彩奈は携帯電話を手にしてふと思った

この人たちの中に居るのだろうか？・・・自分の父親が・・・  
いったい誰が私からのコールを受けるのだろうか・・・？そう思ったら少しドキドキしてきた

15年も過ぎていればいかに昔はかっこよくても今ではただの中年なのだろうし  
あまり期待はしないが、「せめてお願いお腹だけは出ていないでほしい」と  
自分に言い聞かせながら携帯の番号を押してみた

ちょうど同じタイミングで赤いコートの女性の携帯も鳴ったらしくその女性が携帯電話を内ポケットから取り出した  
呼び出しのメロディが鳴っている携帯をチラッとみたと思ったら彼女が彩奈の方を見てニコッと微笑んだ・・・

え・・・？

彼女が携帯の受信のボタンを押したとき彩奈の携帯も通話可能状態に変わった・・・  
そして受話器越しの彩奈の耳に父親の声が聞こえてきた

「彩奈ちゃんきれいになったわね・・・」

彩奈は反射的に赤いコートの女性の方へ視線を移してみた  
赤いコートの女性がニコッと微笑むと彩奈の視線が差し込む中ベンチから腰を上げて立ち上がった  
と・・・思ったら携帯電話を耳に当てながら彩奈の座っているベンチの方へ歩き出したのだ

え・・・？

マジ・・・？

うそでしょ・・・？

## なんでそうなるの？・・・その3

---

携帯電話を耳から離して彩奈の方に向かって歩いてくる女性に・・・

聞いてないわよ・・・

父親に恋人がいたなんて・・・

ましてや彩奈の事を「きれいになったわね」な～んて

私の事まで話すような関係の彼女がいるばかりか

その恋人が彩奈の迎えにまで来るなんて聞いてないわよ！

しかしま～母親ばかりか父親までが彼女を作っていたなんて

これじゃ何のために母親の元を離れて父親に会いに来たのか分かんないじゃないのよ

彩奈は予想外の展開にベンチから立ち上がるのを忘れてそのまま座っていた

そんな彼女の前まで来て少し前かがみになりながら一言・・・

「やっぱりあやつに似て可愛いわね～」

はい・・・？

いまなんと・・・？

いまなんとおっしゃいました・・・？

あやつ・・・？

だれ・・・？

あやつ・・・？

もしかしてお母さんの事？

いや・・・その前に・・・どうして・・・あやつ・・・？

突然の一言に彩奈がポーゼンと彼女の方を見つめている

そんな彩奈に追撃の一言が襲った

「彩奈ちゃんはぬいぐるみって好き？」

あい・・・？

あいあいあい・・・？

なに言っちゃってるわけ・・・？

っていうか・・・

なんなのその馴れ馴れしい態度は・・・？

いや・・・それ以前に話がどこか飛んでない？

「あら？聞いてたのとは違って意外と無口なのね・・・ふふっ」

ふふっ・・・てなに・・・ふふって・・・？

あまりの予想外の展開に彩奈の思考回路が完全に止まってしまっていた。

「今からちょっと寄ってみたいお店があるのよ」

「お店・・・ですか・・・？」

「そうなのよね～帰りに連れ帰ろうかどうしようか？って迷ってるんだけどね」

「連れて帰るって誰かと待ち合わせでもしてるんですか・・・？」

「待ち合わせ？あはは！面白い事をいうのね」

思考回路が停止しそうな彩奈は今までの経験の中で得た会話の習慣が自分に向けられてくる言葉に自動的に答えているだけなのである

「そうね～確かに待ち合わせしてるのかもしれないわね～」

「は～・・・」

「そうなのよね～あの瞳で見つめ返されちゃうと、のり子困っちゃう～ってなっちゃうのよね～」

「あ・・・あの・・・のり子さんって言うんですか？」

「あい・・・？誰が・・・？」

「え・・・？」

「とりあえず行くわよ！」



「あの・・・」

「ん・・・？な～に？」

「あの・・・あなたは父親とはどういう関係の人なのですか？」

「どういう関係・・・？」

「はい・・・」

「なんで・・・？」

「なんでって・・・わざわざ父親の代わりに迎えに来てくれたり・・・」

「あんだって・・・？」

「え・・・？」

「あんにやろう・・・！わざと教えなかったわね！」

「あんにやろう・・・って私の母親の事も知ってるんですか？」

「あやつのことなら誰よりも知ってるわよ！」

「誰よりも知ってるっていったいどんな関係なのですか？」

「ってかさ～あんたさっきからなに父親相手に敬語なんて使ってるの？」

この瞬間・・・彩奈の思考回路は完全に停止してしまっていた。

「な～に、ネジが切れたブリキのおもちゃみたいに固まってるのよ？」

確かにネジが切れたおもちゃである

電池が無くなったおもちゃであり電球が切れた懐中電灯でもある

予想はしていた

ある程度は予想はしていた、それは確かである

「少し変わってる・・・」・・・確かに・・・

幽霊が見えるから？・・・違うと思うけど・・・

「あの人って目立つのよ」・・・確かに目立ってる・・・

かっこいい人・・・？・・・好みの視点が少しズレているような気がする・・・

しか===し！

まさか女装の趣味があるとは思わなかった

それどころか、事もあろうに堂々天下の公道を歩いてくるとは・・・

予想とかそういうレベルの問題ではないと微かに戻る思考回路の中で  
彩奈の耳には母親の高笑いが聞こえてしまうのである

確かに母親には少しお茶目なところがあって

よく彩奈をからかっては一人で笑い転げる事が度々ある

というより母親の密かな楽しみではないかとさえ思える時があるのだ

しかし・・・

しかしである・・・

これはそういうお茶目で許される問題なのだろうか？

娘が15年ぶりに会うという父親との悲しきもあり嬉しくもある大切な再会なのである

父親と母親の離婚の原因はもしかしたら母親のそういう性格によるものではないだろうか？

とはいえ・・・いま目の前にいる女性が父親・・・そんなの聞いてないわよ！と思っても  
すでに時は遅しであった・・・。

「ほら！行くわよ！」

行くわよ？って、なんで女みたいな言葉使いなわけ？

いや・・・それ以前に・・・どこから見ても女性にしか見えないんですけど？

「あの～本当にお父さんなの・・・？」

「違うわよ！」

「え・・・？」

「なにバカな事を言ってんのよ」

「え・・・？だっていま父親だって・・・」

「そうよ！」

「え・・・？だっていま違うって？」

「そんなの見たら分かるじゃない？」

いや・・・ちょっと待って・・・

私の目の前にいるのが私のお父さんだと、この女の人と言ってるけど誰が見ても男性には見えてはいないと思う・・・でも男よね？

んでもって目の前の本人が自分は父親であると言っているという事はやっぱり私の父親って事になるのよね？

でも・・・どう見ても女性にしか見えないし・・・

かといって私をからかっているようにも見えないし・・・う～ん

「とりあえず行くわよ！早くお店に寄りたいんだから」って言われても・・・

切り返しの言葉が見つからない彩奈はとりあえず父親の言葉に従うしかないようである。

「あの・・・」

「なに？」

彩奈は少し考えてみた

もし、この先この女の人と、いやもと目の中にいるこの女装好きの父親と一緒に暮らすという事は

呼ばないとダメなわけよね？パパとかお父さんとかって呼ぶ事になるのよね？

んでもさ、もしよ！もし誰か知らない人に聞かれたなんて言うわけ？

私の隣で女装しているこの人を「私の父です」・・・ダメだわ！それじゃ私まで変態みたいに見られちゃうじゃないのよ！

「ねえ～これからなんて呼んだらいいわけ？」

「誰のことを？」

「目の前にいる自称父親のあなたの事です！」

「ママと呼びなさい！」

ショートしそうな思考回路の中で笑い転げる母親の姿が見えてしまう彩奈であった

しかし・・・この夫婦の離婚ってホントはいったい何が原因だったのだろうか？  
自称父親のこの男性の・・・もとい・・・この女性に・・・いや違う・・・  
う～ん・・・どうでもいいや・・・  
とにかく言われるままにとりあえずこの人が乗ってきた自動車に乗り込んだ

「あの・・・」

「なに？」

「どうしてお母さんと離婚したんですか？」

「あら？聞いてないの？」

確かに彩奈は離婚の原因を教えてもらった事はないのである

「あんたはどう思うの？」

「幽霊嫌いのお母さんと幽霊が見える父親かな？」

「幽霊が見えるって？」

「あれ？違うんですか？」

「見えるわよ！」

「やっぱり・・・」

「あんたは見えないの？」

「え？・・・見えないですよ」

「あ～ん・・・なるほどね」

「え？何がですか？」

「それであんたの隣に居たあの子に気がつかなかったのね」

「はい・・・？」

「あんた、どこかで連れてきたみたいね」

「え・・・？誰をですか？」

「誰って？知らない女の子よ」

「え===？・・・今も居るの？」

「もういないわよ！さっき追っ払ったから」

「ってか・・・ホントに？」

「ホントよ！あんたに嘘ついてどうすんのよ！」

「ホント？」

「しつこいわね！・・・でもあんたのそういうところってあやつに似たのかもね！」

「そういうところ？」

「幽霊に好かれるって事よ！」

「・・・？」

「あんた、な～んにも聞いてないのね？」

「え？どういう事ですか？」

「もともと昔から幽霊が見えてたのはあやつの方なのよ」

「え===？」

「それにあたしが離婚したのは、あやつを守るためなのよ」

「お母さんを守る・・・？」

「そうよ、ヤバイ幽霊だったからなんだけどね、その幽霊をあたしが引き受けたってわけよ」

なんなのこの会話は・・・？

普通に交わす日常の会話とは思えない

まるで映画かドラマみたいな作り話みたいな事をサラッとやってのける父親に驚きながらもどこかでワクワクしてる彩奈なのである

「それからなのよ、話をするようになったのは」

「話を・・・？誰とですか・・・？」

「もちろん幽霊に決まってるでしょ？」

彩奈はこの非日常的な会話の是非を考えるのはやめようと思った。

それよりもヤバイ幽霊を引き受けたって・・・それが離婚の原因？

それじゃ～お互が嫌いになって別れたわけじゃないって事？

やっぱり娘である・・・自分の親の離婚の原因よりもお互いの気持ちの方が気になってしまうのだ。

「でもそれってお互が嫌いになったって事が原因じゃないって事ですか？」

「そうよ！」

「それじゃ～いまでもお母さんの事が好きって事ですか？」

「決まってるじゃないのよ」

いや・・・そんな事を言ったって、ただいまお母さんは違う知らない男と恋愛中なんですけど・・・

お母さんはいったいどこまでこの人に話してたのかしら？

もしかして自分の元旦那がオカマになっている事も知っていたのかしら？

それにこの人も母親が知らない男性と交際しているという事を知っているのかしら？

いや・・・それよりもこの元夫婦は離婚してからの15年の間どんな付き合いをしてたわけ？

「お母さんとは連絡とかって取り合っていたのですか？」

「だ～か～ら～その敬語使いはやめなさい！」

「そんな急に言われても・・・」

「ふふっ、可愛いわね！」

「いや・・・あの・・・」

「そんな顔しちゃってもう～、食べちゃいたくなっちゃうじゃないのよ」

「・・・。」

「あやつは恋愛中でしょ？」

「え・・・？知ってたんですか？」

「もちろん知ってるわよ」

「知ってるって・・・」

「なに？」

「お母さんが誰かと付き合ってる事を知っていながら好きだなんて・・・」

「あ～ん、その事？」

「だって変ですよ？」



「別にどこも変じゃないわよ」

「いえ・・・変です！」

「しかしよく似てるわね～まるで若い頃のあやつと話してるみたいだわ」

「そんなに似てますか？」

「あっ・・・見えてきたわ！」

おいおい・・・まだ話の途中でしょうが？

「あそこのお店よ」

見えてきたのはおもちゃ屋さんである

そういえばさっきぬいぐるみがどうとかって言っていたような気がしたけど  
でも・・・まさかその歳でぬいぐるみもないと思うけど  
ここで誰かと待ち合わせをしてるのだろうか？  
もしかしたらこの父親まで誰かと付き合っていたりして・・・  
しかも・・・その相手が知らない男だったりして・・・あう

何分にも父親が女装しているわけである  
それもただの女装マニアとかそういうレベルではない  
どこから見ても完全に女性なのである  
しかも言葉使いまで女性なのだ  
それに彩奈が気になっているのが父親の仕草である

普通オカマとかニューハーフの人などは大げさな仕草や言葉使いをするのを  
よくテレビとかで見ていたから分かるのだが  
隣に居る父親の場合はまるで違うのである  
なんの違和感も感じない普通に女性なのだ  
オーバーな仕草もしないしオカマ言葉も使わない  
完全に一人の女性のそれなのである

と、いう事は父親に知らない男性の恋人がいてもおかしくないなどと変な事を考えてしまう彩奈  
なのである

「あっそうそう、あんたさ、お母さんの事を誤解してるみたいだから言っとくけど」

「え・・・？」

「あやつはあたしとの約束をちゃんと守ってるのよ」

「約束？」

「そうよ、いつまでもトキメキを忘れない女でいなさい！って約束したのよ」

「どういう事ですか？」

「恋愛の一つも出来ない女にはなるなって事よ！」

「おおお==！着いた着いた着いたわよん！」

あい・・・？

なんなの・・・

この自由奔放な生き物は・・・？

それでなくてもさっき父親が言った言葉の意味ってなに？

「ちょっと！なに？」

はい・・・？

誰に言ってるの？

いきなり振り向いたと思うと後部座席に向かっていきなり問いかけた父親なのだが  
彩奈が見た限りでは誰も乗っていないのである

さっきから時折訳の分からない事を言ってるし・・・オカマだし・・・  
もしかして私の父親ってどこか少しイっちゃってるのではないだろうか？

「なに？変な顔しちゃって？」

「え・・・？だって今・・・」

「ああ・・・こいつのこと？」

こいつ・・・？

この人は誰の事を言ってるの？

「こいつよ！あんたのお母さんにとり憑いていた幽霊って！」

「え・・・？」

「それより、ほら！行くわよ！」

そう言うと父親はドアを開けて外へ出てしまった  
彩名は父親の言葉があまりに唐突すぎて事態を把握は出来ないのだが

自動車の後部座席には幽霊が座っていると聞かされてはじっとしているわけにもいかない  
父親にとっては幽霊は友達かもしれないが彩奈にとってはやはり怖い存在なのである  
映画やコミックの中なら怖くもないし、実際に幽霊と遭遇したとしても怖いとは思わない・・・  
はずだったが

今、自分が乗ってきた車のしかも後部座席にそれがいると聞かされてはなんとも言えない恐怖な  
のである

なので彩奈も慌てて自動車のドアを開けて外に出たのだ

父親はもうお店の中に入ってしまったので彩奈も急いでお店の中に入ったのだが

お店の奥の方で聞き覚えのある声が聞こえてきた

なんとなく恥ずかしいような気持ちのまま声のする奥の方へ歩いていくと

一人の女性が・・・もとい自称父親の女性が大きなリラックマのぬいぐるみを抱えて歩いてきた  
のだ

待ち合わせの相手ってもしかしてそのこと？

そういうえば？彩奈は前に母親が言っていた事を思い出した

「あの人ね～ぬいぐるみが好きなのよね～」

「ぬいぐるみ？」

「そうなのよ、変でしょ？」

「変っていうより精神年齢が低いんじゃないの？」

「あはは！娘にそう思われたんじゃあの人もおしまいね！」

忘れていた・・・

父親との出会い方が出会い方ただけにそっちの方にばかり気を取られていて

おもちゃ屋って言った時点で気づくべきだった

「可愛いでしょ？」

彩奈に近づいてきて嬉しそうに話す父親なのだが・・・不思議とどこか憎めない感じがした

「これ、あんたによ」

「え・・・？私に？」

「そうよ！あんたが今日来るっていうから決めてたのよ！」

「決めてた・・・？」

「そう！この子をあんたにとってね！」

そう言ってリラックマの大きなぬいぐるみを彩奈に抱えさせると  
代金を支払って来るからとお店のレジの方へ歩いて行った  
会計を済ませて戻ってきた父親にそれとなく聞いてみた

「ね～・・・さっき言った幽霊ってホントに車に乗ってるの？」

彩奈は「バカね！嘘に決まってるでしょ？」・・・という言葉に期待したが  
帰ってきた言葉は彩奈の帰り道を冷や汗街道に変えてしまうのである

「嘘じゃないわよ！多分あんたにも見えるようになると思うわよ！」

「え・・・？そんな・・・」

「大丈夫よ！今じゃあたし相棒になってるんだからさ」

はい・・・？

しかしまあまあ次から次へと飽きもせず色々な事が重なる重なる  
いったい何十箱のおせち料理がこの父親から出てくるのだろうか  
彩奈は母親が別れ際に言っていた言葉を思い出していた

「あの人といるときっと退屈しないと思うわよ・・・」

確かに退屈はしないのだと思う・・・

そう思う事は確かに間違いだと、は思う

しかし・・・これは退屈をしないというレベルを遥かに超えているのではないだろうか？

そうでなくても、いまこの瞬間

今、私が乗っているこの車の後部座席にはお母さんにとり憑いていたというヤバイ幽霊が乗っ  
ているみたいだし

そんな状況の中なのだが彩奈はふと考えた

ホントに幽霊が乗っているのだろうか？

もしかして私を怖がらせて楽しんでいるだけなのではないのだろうか？

大体にしてあの母親と一緒にしろかなどど考えるくらいの男なわけだし

離婚したくせになぜかお互いの事を知っている変わった二人だし

母親にしてもいつも別れた父親の事を面白おかしく言っては私を笑わせてばかり  
一度だって父親の悪口を言ってるのを聞いた事もないし

となりに乗っているこの自称父親にしてもそうだ

離婚してから15年という歳月が過ぎているというのに

まるでしょっちゅう会っているかのように母親の事を口にしてるし

あの母親と話が合うという事はおそらくは今、隣で車を運転している自称父親も  
母親と同じような性格をしているのではないだろうか？

そんな疑問が一つ彩奈の中で二葉から三つ葉へと成長していくのだった

「あら？どうしたの？急に大人しくなっちゃって」

「あの・・・」

「あの・・・じゃなくて知らない間柄でもないんだしあたしの事をちゃんと呼びなさいよ！」

いえ・・・ホンの数時間前まではまったく知らない間柄だったのでは？

「え？・・・それじゃ～お父さん？」

「あん？違うでしょ？」

あ===もう！

違うとか違わないとか、そんな問題じゃないでしょうか？

どこの世界に自分の父親の事をママって呼ぶ子供がいるっていうの？

そうじゃなくても自分の母親の事だってママなんて恥ずかしくて言えるわけないわよ

私はどこぞの外国かぶれの人種じゃなくて根っからの日本人なんだから

母親はお母さん！父親はお父さん！・・・私ってどこか間違ってるかしら？

いや・・・今はそんな事を考えてる場合ではないのである

こうして車で走っている間でも後部座席にはあのヤバイという幽霊がホントにいるのかいないのか？

それをちゃんと確かめておかないとこっちに来てもこの自称父親にかわれる日常が待っているのである

「今は呼び方の問題じゃなくて他に大事な事があるでしょ？」

「ん・・・？な～に、大事な事って？」

「後部座席の事よ！後ろの席の事！」

「なに？あんた後ろの席に乗りたいの？」

「そうじゃなくて、後ろの席にいるっていう幽霊の事よ」

「な～んだ、そんな事？」

そんな事？

はは～ん・・・やっぱりウソだったんだ！

私を怖がらせようとして楽しんでたのね？

やっぱりこの人もお母さんと同類みたいだわ

「あんた、ちょっと姿を見せてあげて！」

「いえ===！ご遠慮します！」

彩奈の思考回路は反射的に拒絶反応してしまうのだった



車の中というある意味監禁されているような今の彩奈にとってはとにかく話題を変えなければと両手の汗を必死に抑えていた万が一である、万が一にでも幽霊の話がホントだったらと思うと見えない背中に誰かがいるような気がしてくるのである

「どうして女装してるんですか？」

「あら？こいつの事はもういいの？」

「もういいの？じゃなくて永遠に遠慮します！」

「あはは！あんた可愛いわね！」

可愛いの意味がよく分からない彩奈なのだがとにかく話題を変えてしまわないとこの父親の事だから後部座席に乗っているという幽霊を私の前に出して驚かせて笑い転げないとも限らないのだ

「だから、どうして女装してるんですか？」

「別に女装なんかしてないわよ！」

「女装してないって言っても、今の格好がそうじゃないんですか？」

「あら？あんたも変な事を言うわね？」

「変な事？」

「そうでしょ？女性が女性の格好しててどこが悪いの？」

「だって、そんな事を言ったって私の父親なんじゃないんですか？」

「誰が・・・？」

「あなたがです！」

「違うわよ！」

あ====っ！また始まった！この堂々巡りの八の字ループが！

「あの・・・それじゃ～お仕事は何をしてるんですか？」

「あっそうそう！そう言えばあんた仕事の方はどうすんのよ？」

「私ですか？」

「そうよ！後ろのこいつが働くわけないでしょ？」

あ====っ！またそっちに話を持っていく！

「とりあえずは、どこかでバイトでも探そうかな～って思ってます」

「なに？あんたバイトが好きなの？」

「別に好きじゃないけど・・・」

「じゃ～どうしてバイトなんか探すの？」

「どうしてって・・・そういう問題ですか？」

「あんたさ～ぬいぐるみ好き？」

「はい・・・？」

「はい・・・？じゃんくて、ぬいぐるみが好きかどうかって訊いてんのよ！」

「別に嫌いじゃないですけど・・・」

「別に・・・って、ぬいぐるみとお話したり一緒に寝たりとかってしないの？」

「いや・・・それは・・・」

実は彩奈自身もホントはぬいぐるみが好きなのである。

なのでぬいぐるみと話をすることはもちろんのこと、ぬいぐるみと一緒に寝るのはいつもの事なのだ

だからって「私はぬいぐるみが好きです」とは、どこか少し恥ずかしくて言えないのである

「あんた、ぬいぐるみとかって持ってないの？」

「え．．．？一応はまだお母さんの所に置いてあるけど．．．」

「どうして一緒に連れてこなかったの？」

「こっちの生活が落ち着いたらって思って．．．」

「ふ～ん．．で？」

「で．．．？って．．．」

「何のぬいぐるみ？」

「え～．．．一応．．．ラスカルを少々．．．」

「あら？あんたラスカルが好きなんだ？」

「なんとなく可愛いかな～？って．．．」

「それじゃさっきのお店で働いてみたら？」

「さっきのお店って．．．あのおもちゃ屋さん？」

「そうよ！」

「でも、そんな急に働きたいって言っても、はいそうですか！ってわけにはいかないでしょ？」

「いくわよ！」

「どうしてですか？」

「だって、あのお店ってあたしのお店なのよ！」

はい・・・？

「ウソでしょ？」

「あたしウソついてないわよね？」

彩奈は何かの気配を感じて父親の方へ視線を移すと

彩奈と父親の間にあるコンソールボックスの上で彩奈を見ながらうなずいている何かが姿を現した

「ちょっと！納豆はネギとノリとかつお節をちゃんと入れるのよ！」

「はいはい・・・！」

「ノリはちょっと炙ってから手の平でコチョコチョコするのよ！」

まったくお母さんがいつも言っていた通りだ！

父親はこと納豆の事になるととにかくうるさいといつもお母さんに聞かされていたけどまさかこれほどまでにうるさいとは思わなかった  
まるで幼稚園か小学生が騒いでいるみたいだわ！

「あんた、どう思う？」

娘の彩奈に聞こえないように静かに問いかけてみた

「さ～どうだろう？」

「どうだろうって？あんた分かんないの？」

「霊力は別にそれほどじゃないぜ？」

「そうなの？あやつの娘だからそれなりに霊力があるかと思ったんだけど」

「霊力は人並み程度なんだが・・・」

「なんだが・・・？なによ？」

「ちょっとな・・・」

「だからなに？」

「さっき俺の姿を見せただろ？」

「彩奈のやつ飛び上がって驚いてたわよね！ふふっ」

「そんなときによ、俺もビックリするくらい霊力が上がったんだよ」

「どういう事？」

「わかんね〜」

「もしかしたら覚醒タイプって事かしら？」

台所で料理を作っている彩奈がいきなり振り返った

「まさか家の中まで幽霊なんか連れてきてないわよね？」

「え・・・？」

ナツキは顔をブルブルと横に振って答える・・・

このナツキという名は父親の名前なのだがもともとの名前ではないのである

もともとは真樹という名前だったのだが数年前に名前を変えたのである

なぜかという、いつもサインを書くときに相手がイチイチ驚いて真樹の方を見返すのだ

家に来る宅配の人なら別に旦那さんの名前だろうと思うのだから

仕事上で自分のサインが必要になる時に困るのである

ま〜オカマですとでも言えばそれはそれでいいのだから

せっかく女になった事だしサインを書く度にイチイチ見返されるのもちょっとと思い

男性とも女性ともどっちにもなれる名前として「ナツキ」という名前にしたのである

といえ、なぜ名前をカタカナにしたのかは不明である

「そういえば、さっき届いてたハガキ見たんだけど誰かと暮らしてるの？」

「ん・・・？どうして？」

「だって名前が違ってたわよ・・・ってか苗字が同じだったんだけどどういう事？」

「あはは！それあたしの名前よ！」

「あたしの名前って、なに？名前変えたの？」

「そうよ！せっかく女になったんだしね！」

「誰が・・・？」

「え・・・？」

あたしの話し方についてこれるって、やっぱりあやつに似たのね  
でもさっきあいつが言った霊力がいきなり上がったって少し気になるけど

「あ～ちょっと！ちゃんと味の素は入れたの？」

「なんなら卵の黄身も入れようか？」

あんた、なんで卵の黄身の事を知ってるの？

「でも、どうして納豆にはそんなにうるさいんですか？」

「ん？別にうるさくないわよ！」

「いや・・・うるさいでしょ？」

「そうかな～？」

「よくお母さんが言ってたけど、その通りなんだもん驚いたわ」

「何が・・・？」

「納豆がよ！」

「あはは！あんた変わってるわね？納豆に驚くなんて！納豆見た事ないの？」

これはお母さん以上の天然かもしれないわね

いえ・・・天然ということじゃなくてどこかネジが一本・・・いえ数本抜けてるんじゃないかしら？

「ちょっと！納豆がこぼれるでしょ？」

「はい・・・？」

「はい？じゃなくて・・・あ===っ！もう！テーブルに納豆が落ちたじゃない？」

「どこに？」

「そこよ！そこ！」

「あっ・・・ホントだわ！」

「ってか、納豆を拾って食べちゃダメでしょ？」

「え・・・？」



「あ～も～子供じゃないんだから！」

「あんたなに笑ってんのよ？」

「え・・・？」

彩奈は瞬間的に後ろを振り返った

「あっ、そっちじゃないわよ！」

「え・・・？」

「あんたの隣の席よ！」

そのとき彩名の隣にある椅子がカタカタと動いた・・・  
それを見た彩奈が飛び跳ねて席を立つかと思ったのだが  
なにを思ったかカタカタと動いた自分の隣の椅子に向かって

「あんたも笑ってないでちゃんと食べ方くらい教えなきゃダメでしょ？」

これには笑っていた幽霊も驚いたらしく急に隣の椅子がおとなしくなってしまった  
そして幽霊が彩名に話かけたのだが・・・  
もちろん幽霊の言葉など聞こえるはずはないと思って話しかけたのである

「そんな事言たって俺納豆嫌いだから食べたことないし・・・」

次の瞬間、彩名が席の目の前のテーブルの中央に置いてある納豆の入ったどんぶりを  
幽霊の目の前に置いたもんだから幽霊もたまったもんじゃない  
今度は隣の椅子が後ろにひっくり返ってしまったのだ！

「あんた・・・納豆が嫌いなんだ～・・・」

「え・・・？」

椅子とともにひっくり返った幽霊が思わず聞き返してしまったのだが・・・

「お前、見えるのか？」

「別に見えないけど声が聞こえたからそこにいるんでしょ？」

「声が聞こえたのか？」

幽霊と父親のナツキが思わずお互い目を合わせたのだが  
ナツキはニヤリとほほ笑みながら

「はは～ん・・・それであんたは納豆の時はいつも部屋の中に入らなかったのね？」

これが見えない一人と見えてる二人の合わせて三人での奇妙な会話が初めて交わされた瞬間だった

「ね～お父さん？」

「誰が・・・？」

「あああ===っ！私の目の前にいる女に決まってるでしょ===が！」

「それなのにどうしてお父さんなわけ？」

「それは女装してるからでしょ！」

「違うわよ！」

「違うないでしょ===が！」

「あんた、なに怒ってるの？」

どうも我が父親は、こと男性か女性かって事になるとわけの分からない屁理屈をこねる性格のようなので

ここはとりあえず「人参」でも目の前にぶら下げてればなんとかなるのでは？

彩奈が思うに、そうでもしないと会話が全然前に進まないのである。

「大丈夫よ、人前ではちゃんと、ママ！って呼んであげるからね」

「ホント？」

ほうら！きたきた！あと一歩ね！

「だから誰もいないときはお父さんって呼ぶからね！」

「おい！出てこいよ！」

「幽霊は一人とはカウントませ～ん！」

「え===？」

「え===？じゃないでしょ===が？」

「だって幽霊だったら他にもいっぱいいるんだけどな〜」

「あい・・・？さっきの幽霊だけじゃなくて他にもいるの？」

「いるわよ」

「どこに？まさかここに？」

「あはは！ここにはいないわよ！ここにいるのはあいつだけよ・・・ってかどこ行ったあいつ？」

ふ〜ん・・・意外と正直者みたいね？

なんだか話の内容とかが適当だからそれなりにウソもついているのかと思ったらそうでもないみたい

別に私には幽霊なんか見えないわけだから、幽霊が近くにいるってウソをついても分からないのに

ちょっと変わってるところがあるけど根は真面目なのかもしれないわね

「ね〜ちょっと聞いてもいい？」

「ん？な〜に？」

「幽霊とお知り合いという事はあの世とかって事も知ってるの？」

「知らないわよ」

「幽霊に教えてもらった事ないの？」

「違うわよ！幽霊たちも知らないって事よ！」

「知らないって・・・だって幽霊でしょ？」

「そんな事を言ったって幽霊だってまだあの世には行ってないのよ」

「行ってないって・・・でも幽霊なんだから分かるんじゃないの？」

「あたしも最初はそう思ったのよ」

「幽霊はなんて？」

「あの世なんてどこにもないって言ってたわ」

「ウソ？」

「ホントよ！あの世って人間が勝手に作り上げた世界であって実際は違うみたいよ」

「違うって？」

「霊魂があるっていうのはホントみたいだけどね」

「霊魂はホントにあるんだ？」

「そうそう、そんでもって霊魂は永遠に死なないんだって言ってたわよ」

「死なないって言っても、それじゃ人が死んだらみんな幽霊になるの？」

「う～ん・・・話すととっても長くなるからだけど、そのうちあんたにも分かるわよ」

「どうして？」

「あんたに会わせたい幽霊が一人いるって、さっきあいつが言ってたから」

「はい・・・？」

「でも不思議ね～お父さんとは今日会ったばかりなのに、もう普通に会話が出来てるなんて・・・」

彩奈はお風呂に入りながら今日の出来事を振り返っていた  
もともと母親に体型が似ている彩奈なのだがそのおかげで悩みも母親と同じところにある  
細身で小柄な体型は洋服を選ぶのにはもってこいの体型なのだが  
困ったことに胸がないのである・・・。  
これは母親も同じでどんなにお色気があるワンピースを着ても  
出るところが出ていないとお色気も半減してしまうために  
その手の洋服は選択肢から泣く泣く外さねければならないのである  
いわゆる幼児体型という事なのである

「でもまさか幽霊が出てくるとは思わなかったわ」

彩奈はふと考えた・・・。

その頃リビングではナツキが幽霊とある事について珍しく真面目な話をしていたのだが  
突然リビングのドアが開いたかと思いきやいきなり彩奈が入ってきたのだ

「ちょっと！幽霊に言っといてよ！私のお風呂とトイレと着替えを覗いたら絶対に許さないから  
って！」

リビングのソファーに置いてあるぬいぐるみがカーペットにひとりでに転がった・・・のではなくて

ソファーに座っていた幽霊が床にひっくり返ったのだった

そして彩奈の突然の来襲に父親であるナツキは彩奈の方を見たまま思わず固まってしまっていた

「ちょっと！聞いてんの？」

「え・・・？」

「今言った事をちゃんと幽霊にキツく言っといてよ！」

「いや・・・その前に・・・せめてバスタオルだけでも？」

「え・・・？」

自分の格好にハッ！と我に帰った彩奈がものすごい速さでリビングから消えていった  
あとに残されたナツキと幽霊は何が起きたのかとボーゼンとリビングのドアの方を見ているのだ  
った

慌ててお風呂の湯船に飛び込んだ彩奈だったのだが・・・

まさか父親との15年ぶりの再会の日に関の裸まで見せてしまう事になるとは思ってもみなかっ  
たわけで

あまりの恥ずかしさにしばらくは湯船から出ることが出来なくなっていた

「とりあえず話を元に戻すわよ！」

「うん・・・そうだな・・・それがいい・・・」

「しかしなんだったんだ・・・今のは？」

「さ～・・・でもよ～見なかった事にした方がいいと思わないか？」

「んな事言たってモ口に丸見えだったわよ！」

「やめろ！思い出すだろ？」

「母親に似たな？」

「うん、俺もそう思った」

「とりあえず記憶から消した方がよさそうね」

「消せるか？」

「消せない・・・ムフフ・・・」

「で、どうする？」

「明日にでも会わせた方がいいんじゃない？」

「少し早くないか？」

「どっちにしても会わせる事になるんだから早い方がいいわよ」

「それもそうだな・・・」

「それに奴らはもう動き出してるしね」

と、真面目な話に修正しようと懸命な二人・・・いや、ナツキと幽霊なのだが  
どうしてもさっきの光景が思いだされてしまって会話が会話として成り立っていないのである



「ねえ～あんたどうしてお母さんにとり憑いてたの？」

「どうして？」

夜も2時を回った頃に彩奈はなかなか寝付けなくて  
何か飲み物でもと思って2階の自分の部屋からキッチンにおりてきた  
冷蔵庫を開けるとなんと冷蔵庫の中には100%ジュースがビッシリと並んでいたのだ  
りんごにオレンジ、グレープフルーツにパイナップルとほとんどの種類が並んでいる  
「お父さんは炭酸は飲まないのかしら？」などとひとり言をつぶやいてると  
キッチンのテーブルの方から声が聞こえた。

「コーラならそこの戸棚に入ってるぞ！」

彩奈が振り向いてテーブルの方を見ても誰もいないのだが  
テーブルの右の椅子がカタカタと小刻みに動いていた

彩奈は別に驚くこともなく冷蔵庫からグレープフルーツ100%を取り出して  
並べて置いてある中からリラックマのグラスを手に持つリビングへと歩いていく

「ね～別に姿をあらわしてもいいわよ！」

リビングの長椅子のところにす～っと人影があらわれたのだが  
昨日自動車の中で見た姿とは違っていた  
そこにあらわれたのはオールバックに黒ふちメガネをかけてグレーの背広を着た幽霊だった

「あれ？あんたは昨日の幽霊じゃないの？」

「同じだよ！」

「同じって？昨日見たのと全然違うわよ？」

「彩奈ちゃんにはこっちの方がいいかな～？って」

「なに馴れ馴れしく私の名前を呼んでんの？」

おいおい！そっちかよ？

あの親あってこの子供だなこりゃ？

親子そろって違うネジでも付いてるんじゃないの？

「ってか、あんたいろんな姿になれるの？」

ちょっとちょっと今頃かよ？普通は逆だろ？

「彩奈ちゃんは驚かないのか？」

「なにに？」

「なににって、幽霊を見てさ？」

「驚かないわけないでしょ？今だって心臓がバクバクいってるわよ！」

どこが・・・？

心臓バクバクじゃなくともっきりキラキラしてる目で興味しんしんって感じに見えますけど？

幽霊がそんな彩奈の事を見ながらフッフッ！と少しニヤけた目をしてしまったのだ

「あんた！なに思い出してニヤけてんのよ？」

「あ・・・」

「まさか？」

「え・・・？」

「私の着替え覗いてたんじゃないでしょうね？」

おおお～い！そっちかよ？

素っ裸でリビングに飛び込んできた方かと思ったじゃないか？

「そういえば、あんた見てないわよね？」

「え・・・？何をで・・・？」

「私がリビングに入ってきた時の事に決まってるでしょ？」

う～ん・・・いかん・・・

この親子は物事を考える感覚があまりに似すぎてるみたいだ

「ねえ～あんたどうしてお母さんに取り憑いてたの？」

「どうして・・・？」

「だから、なんでお母さんに取り憑いてたわけ？」

「あ～その事？別に大層な理由があったわけじゃないぜ？」

「それじゃ～どうしてよ？」

「ちょっと腹が減っててな、魂を食べようと思っただけだよ」

「おおお===っ！」

彩奈が投げた灰皿が幽霊の頭に直撃したもんだから  
そのままソファーごと床にひっくり返ってしまった

ところがこれに驚いたは幽霊の方ではなくて灰皿を投げた彩奈の方で

「ちょっと！あんた幽霊でしょ？」

「おおお===っ！」

投げた灰皿が小さめとはいえ直撃した灰皿がガラス製の灰皿なものだから  
幽霊もたまったもんじゃないのである

「ちょっと！なんで幽霊のあんたに灰皿が当たるのよ？」

「なんでって言われても当たるもんは当たるがな」

「だからなんで当たるわけ？」

「そんなの知らんがな！」

「嘘みたい・・・」

ひっくり返ったソファーを直していると

「なんであんたがソファーを直せるわけ？」

「え・・・？」

「あんた幽霊なんでしょ？」

「いや・・・そう言われても・・・」

「幽霊って普通は透き通ってるじゃないの？」

「どこで教わったんだ、そんな適当な話？」

「どこでって・・・？テレビとか本とかだけど・・・ホントは違うの？」

「半分は当たってるけど半分は間違ってるな！」

「どういう事よ？」

「ちょっと待ってくれ・・・しかしお前で2人目だわ、俺に物を当てられたのは」

「二人目って？」

「ああ・・・1人目はお前の父親だよ」

「お父さんが・・・？」

「ああ～そうなんだ！あんときは鍋が飛んできたけどな！」

「あはは！」

「あ～イテテ・・・頼むからいきなり物を投げないでくれよな！」

「ごめんごめん・・・ってか分かってたら投げないわよ」

「俺だって当たると分かってたら避けたけど・・・あ～ビックリした！」

幽霊がすっと立ち上がってキッチンの方からグラスを1つ持ってきた。

「俺にも飲ませてくれよ！」

「は・・・？」

「いや・・・そのグレープフルーツ・・・俺の大好物なんだよな～」

「なに言ってんの？」

「なにして・・・そこのグレープフルーツジュース・・・」

「だから、なんで幽霊のあんたがグレープフルーツジュースを飲めるわけ？」

「いや・・・オレンジだってアップルだって飲めるぜ！」

「ちなみに炭酸は？」

「いや～あれは体が弾けそうになるからちょっと苦手なんだわ」

「じゃ～なに？冷蔵庫に入ってるジュースの列はあんたが飲むためのわけ？」

「そうだよ」

「じゃ～炭酸は？」

「ナツキが飲んでるよ」

「そういう話してんじゃないわよ！」

「へ・・・？」

「なんであんたの100%ジュースが冷蔵庫でお父さんの炭酸が外にあるのかって事よ」

「な～んだ、そんな事か」

「そんな事かってどうんな事よ？」

「簡単な事だよ、俺が冷蔵庫から炭酸を取り出して100%と入れ替えたからだよ」

「誰が・・・？」

「だから俺だってば」

「だからどうして幽霊が100%に触れるわけ？」

「ちゃんとソファーにも座れるぜ！」

「確かに・・・」

「それより傷バンソーコ欲しいんだけど・・・ちょっと額から血が・・・」

額をおさえてる幽霊から救急箱の在り処を聞いて取りに行ってきたのだが

「あんた自分で救急箱を持って来れないの？」

「いや～彩奈ちゃんもどこに救急箱があるかを知っておいた方がいいかな～って」

「だから自分で救急箱を持って来れるの？来れないの？」

「時々・・・落とすときもあるよ・・・」

「そういう事を言ってるんじゃないでしょ===が？」

「ま～ま～グレープフルーツジュースでも飲もうよ」

まったくもう～

と、思いつつ・・・これがホントの幽霊なわけ？

なんか自分がイメージしてた幽霊とは全然違うんだけど

幽霊＝呪い・祟り・怖い・恐怖・とり憑く・・・エトセトラ・・・なものだと思ってたけど・・・

「そういえばさっき魂を食べるとかなんとかって言ってたわよね？」

「うん！言ってた！」

「魂を食べるってどういう事？」

「う～ん・・・食べるというより同化するって言った方がいいかな」

「同化？」

「いわいるコラボレーションってやつだな！」

「それじゃ～同化しちゃったらどうなるわけ？」



「別にどうってわけでもないよ」

「もっと分かりやすく教えてよ」

「魂ってのは単体で生きてるのと集合体で生きてるのに分かれるんだ」

「ということは食べられると集合体の一部になるって事？」

「そうそう！簡単に言えばそんな感じ！」

「う～ん・・・それじゃ食べられた方の魂の意識とかはどうなるの？」

「ちゃんとあるよ」

「んでも、意識があるっていても自由とかはないんじゃないの？」

「そうでもないさ」

「そうでもないってどういう事よ？」

「ま～簡単に言えば彩奈ちゃんがいるこの世界と同じって考えればいいんじゃないかな？」

「この世界ってこの地球とかって事？」

「ま～そんな感じ」

「って事は例えば地球があんたであんたの中にいる魂はこの世界に住んでいる人間って事？」

「そんな感じだと思ってもいいと思うぜ」

「じゃ何？食べられた魂は食べた魂の中で自由に暮らしてるって事なの？」

「ま～似たようなもんかもな」

「んじゃさ、食べられた魂は食べた魂の中で家を作って住んでてお仕事に行ったりもするの？」

「う～ん・・・かもしれないな・・・」

「かもしれないって、それじゃ結婚したり子供が出来たりとかもするって事なの？」

「う～ん・・・こう言った方が分かりやすかな？人間が夢を見てる感じに似てるんじゃないかな？」

「覚めない夢って事？」

「ま～そんな感じだと思ってもいいと思うぜ」

「じゃ～魂どうしはお話しとかは出来ないわけ？」

「いや、自由に話とか出来るぞ」

「なんか複雑な世界みたいね」

「ま～魂の世界だからな」

「それじゃ～あんたはどうなの？単体なわけ？それとも集合体なわけ？」

「俺か？俺は集合体の方だぜ」

「じゃ～集合体の魂の場合って誰が主導権を持つの？」

「最初のやつだよ！食べられた方はその食べた方の中に吸収されるからな」

「ふ～ん・・・で、あんたは何個の魂の集合体なの？」

「1805個だな」

「え・・・？」

「ん・・・？」

「そんなにいるの？あんたの中に・・・？」

「ま～な！」

「でも、どうして食べるの？」

「簡単に言うと同化してる魂の数が多いほど強力な魂になれるって事かな？」

「どういう事？」

「うんと、魂は単体の時をレベル1とすると俺はレベル1805あるって事になるんだ」

「そのレベルが魂の強さになるわけ？」

「ま～、食った魂にもよるけど、だいたいは食べた分だけ強くなるって事だな」

「ってことは、あんたメチャクチャ強いって事？」

「メチャクチャかどうかは知らんけど少しは強いぞ！」

「ほかもいるの？そんなに魂を食べた幽霊って？」

「ま～けっこういるんじゃないかな？」

「ちなみに聞くけど・・・」

「ん・・・？」

「あんたはいったい誰の魂なの？」

「俺か？・・・知ってると思うけど本能寺で死んだ信長だよ」

「あ・・・い・・・？」

「ちょっと！あんまり笑わせないでよね！」

「ん・・・？なにが？」

「何が？じゃないでしょ？なんであんたが信長なわけ？」

「なんでって言われてもそうなんだから仕方がないがな」

「でも、ホントにいたんだね信長って？」

「そりゃいたぜ！だけど歴史の本なんかはかなり適当みたいだけどな！」

「適当って？」

「お前知ってるか？俺はホントは本能寺で死んだんじゃないんだぜ」

「うそ？だって教科書とかにも本能寺で死んだって書いてたわよ？」

「光秀のたろべ〜が謀反したらしいな？」

「なに？それも違うの？」

「全然違うがな！」

「うそ〜？じゃ〜なんで信長は死んだのよ？」

「病気だよ！」

「病気？」

「ああ・・・原因不明のな！」

「いつよ？いつ死んだわけ？」

「本能寺の変の1ヶ月くらい前かな？」

「それじゃ～本能寺の変って実際はなかったって事？」

「いや・・・ありゃ本当だけど・・・たろべ～が謀反ってのはうそだな」

「じゃ～どういうことなのよ？」

「ホントは謀反じゃなくて本能寺の信長を助けに来て一緒に死ぬ予定だったんだけどな」

「あんたはその前に死んでたんでしょ？」

「ああ・・・だから影武者だよ！」

「な～んか嘘みたいな話しだわ」

しかし幽霊を目の前にして話をしている以上・・・まんざら信じないわけにもいかないのである  
もし嘘を言っているなら、こんなにスラスラと返答が出来るわけがないと彩奈は思った。

「でも、信長って冷酷非道で第六天魔王とかって言われてたんでしょ？」

「あはは！」

「あはは！って、いまのあんたを見てるととてもそんな冷酷非道に見えないんだけど？」

「そりゃそうだ！俺は信長の一部だからな！」

「はい・・・？どういう事？」

「信長ってのは3つの靈魂から出来てるんだ」

「3つの・・・？普通は1個じゃないの？」

「普通はな、でも信長は魔王の血を受け継いでたからもともとが普通の靈魂とは違うんだよ」

「魔王・・・？」

「もともと魔王って言葉は靈魂の世界の言葉なんだぜ！」

「それじゃ～一部って言うのはどういう事なの？」

「ああ・・・俺が死んだ時に靈魂が3つに弾けたんだよ・・・」

「そんであんたはその中の一つって事なの？」

「ああ・・・そうさ！」

「でも、あんた怖そうに見えないんだけど？」

「そりゃそうさ！信長の魂は王と情と魔の三つから成り立ってるんだ」

「そんであんたはその中のどれなわけ？」

「王だよ！」

「ってかさ～普通は善とか悪とかなんとかってなるんじゃないの？」

「そんなの人間が勝手に作っただけだろ？」

「そうなの？・・・でも王って？」

「王の血って事だよ」

「王って靈界の王の事？」

「ちょっと違うけど・・・ま～そのうち分かるよ」

「そういえばさっき言った、5千とかって魂を食べた靈魂ってどんな奴なの？」

「ありゃ～第二次世界大戦の亡霊どもの作り出した悪魔だ！」

「作り出した？」

「ああ・・・もともとのコアがないんだ！」

「コアがない？・・・最初の靈魂がないって事？」

「ああ・・・あのまま膨張したらマジでヤバイぜ？」

「ヤバイ・・・？」

「ああ・・・その事でお前に会ってもらいたい奴がいるんだ」

「お父さんが言ってた事？」

「明日にでも会ってみてくれ！」

「誰なの？・・・その会わせたいって人は？」

「人じゃないよ！靈魂だよ」

「で・・・誰の？」

「俺の娘だ！」

「は===っ？」

「あんたの・・・娘・・・？」

「ま～な！」

「あんたの娘ってなんて名前なの？」

「市って言うんだけど聞いたことあるだろ？」

「何言ってるの？お市様はあんたの妹でしょ？」

「なんか知らんけどそういう事になってるみたいだな」

「なってるみたいだな？って・・・なに？ホントは違うの？」

「他にも俺に息子が何人か居たみたいと言われてるみたいだけどホントは違うぞ」

「違うってのは？」

「俺の子供は市だけだぜ！」

「うそだ？」

「ホントだって！」

「んじゃな～に？歴史の本ってウソだっていうわけ？」

「ウソかどうか知らないけど、実際にその時代に行って見てきたわけじゃないだろ？」

「ま～確かにそうだけど・・・」

「そのうち分かると思うから今は気にしなさんな！」

いったいどこまでがホントでどこからが作り話なのか彩奈は分からなくなってきた  
それでも目の前にいる幽霊と話をしているということ自体が未だに信じられない光景なわけで  
世界中にはいろんな霊能力者とか霊媒師とかがいるのだが



はたして、今の彩奈のように幽霊と話が出来るとい  
今の彩奈みたいに幽霊と普通に話をしてる霊能力者っているの  
だろうか？

でも、それじゃ心霊写真とか心霊動画に心霊現象とかってホントの事なの  
だろうか？  
確かに幽霊がいるという事は今の彩奈にはハッキリと分かる・・・  
分かる事は分かるのだがあまりに違いすぎているのである・・・  
テレビや映画、それから雑誌や本などから受けていた幽霊の印象とは全然  
かけ離れているのである。

「ね～それじゃさ～テレビでよくやってる心霊写真とか心霊動画とか  
ってあれってホントの事なの？」

「ん・・・？あれは9割がウソだな」

「ウソ・・・？」

「作り物って事だよ」

「少しならまだ分かるけど・・・9割って事はほとんどが作り物  
って事？」

「考えても見る、テレビとかで出てくる幽霊ってみんな同じだと思  
わないか？」

「う～ん・・・言われみれば・・・」

「なんで幽霊にはデブがいないわけ？なんでみんな髪が長くて前に  
だら～んと髪の毛を垂らしてるわけ？」

「う～ん・・・」

「俺を見てたら分かるだろ？俺が正真正銘の幽霊ってやつだよ！」

妙に説得力があるのではあるが・・・彩奈はなんとなく可笑しくな  
って笑い出すのである。

「それで明日会うわけ？そのお市様の幽霊に？」

「ああ・・・早い方がいいだろうからな？」

「でも、どうして私なわけ？」

「とりあえず、市に食わせてみようかなって思ってさ」

「何を・・・？」

「お願い・・・その前に右手のグラスはテーブルの上に置いて欲しいんだけど・・・」

「でもどうしてこの幽霊は標準語で話すわけ？」

おもちゃ屋に行く自動車の中で彩奈が父親に聞いてみたのだが  
父親は素知らぬ顔でハンドルを握りながらタバコを吸っているのである。

「ちょっと！聞いてんの？」

「彩奈ちゃん！彩奈ちゃん！それじゃダメだよ」

後部座席に乗っている信長の幽霊が彩奈の耳元で囁いた・・・。

あ～も～めんどくさいわね！この父親は！

「ね～ママ？」

「な～に？」

「どうしてママって呼ばないと返事しないわけ？」

「あはは！ほらな！俺の言った通りだろ？」

「なに？」

「あはは！彩奈ちゃんと奈緒はよく似てるって事だよ」

「どこが？」

「そういうところが・・・」

「それよりあんたはどうして標準語で話すわけ？」

「だって何百年も前の方言なんてもう忘れたし、今の方が話しやすいんだよ」

「そういう問題なわけ？」

しかしなぜにこの信長の幽霊は普通に後部座席に座っているのだろう・・・？  
幽霊なのだから瞬間移動なり空を飛ぶなりしたらいいのに？

「あんたさ、どうして後部座席に乗ってるの？」

「どうしてって・・・」

「空とか飛べないの？」

「誰が？」

「あんたがよ！」

「そんな鳥でもあるまいし・・・」

「それじゃ～瞬間移動は？」

「なにそれ？」

「だってよくテレビとかではやってるわよ！いきなりあらわれたりとかしてさ」

「あれは別に瞬間移動ってわけじゃないんだよ」

「じゃ～どういう事なの？」

「う～ん・・・瞬間移動だな！」

「はい・・・？」

「いやいや・・・そうじゃなくて・・・」

「だからどういう事なのよ」

「うん、瞬間的に移動は出来るけどある一定の範囲だけって事かな」

「そうなの？何百キロも瞬間移動出来るんじゃないの？」

「そんな無茶苦茶な・・・」

「そうなの？」

「だってさ～日本の幽霊を海外で見かけたなんてあんまり聞かないだろ？」

「確かにそうね」

「ヒコーキにでも乗らない限り海外になんて行けないんだぜ」

「そういえばさ～海外ではよく悪魔とかって聞くけどあれは何なの？」

「う～ん・・・人間で言えば人種の違いみたいなもんかな？」

「そうなの？」

「うん、日本にもいるだろ？」

「日本にも悪魔がいるの？」

「違うよ！日本では妖怪とかって呼ばれてるやつだよ」

「え・・・？日本の妖怪って悪魔と同じなわけ？」

「ちょっと違うけど、ま～似たようなもんだな」

「なんかウソみたいな話ね？」

「あはは！それは人間の方が悪魔だの妖怪だのって勝手に作り上げてるだけだぜ」

どうもこの信長の幽霊と話をしていると

今まで自分が得てきた情報というものがだんだんと分からなくなっていく彩奈なのである。

「いきなり全部を理解しようとしなくてもそのうち分かってくるから大丈夫よ」

「だから！どうしてあんたはママって呼ばないと返事をしないわけ？」

奈緒は笑いながらハンドルを右へ回すと自動車はおもちゃ屋の駐車場へと入っていった。

まだ10時前だというのにお店の玄関が開いているようである。  
自動ドアになってる玄関に入るとお店のスタッフがもう来ているようで  
何やら陳列してある商品をチェックしているようである。  
私たちが入っていくとすぐに気がついたみたいでこちらに駆け寄ってきた。

「おはようございます！店長・・・あれそちらのお嬢さんは？」

「こいつ、奈緒の一人娘なんだぜ！」

「そうなんですか？」

はい・・・？

なに・・・？

このスタッフのお姉さんにも一緒に来たこいつが見えるわけ？

「こんにちはお嬢さん・・・お名前は？」

「はじめまして彩奈といいます」

「彩奈ちゃんね！よろしくね！」

う～ん・・・

やけに馴れ馴れしいわね？

「ね～信ちゃん、いつのも奥の子お願い・・・」

「また落ち込んでるのか？・・・仕方ね～な～」

仕方ね～な・・・？

いや・・・その前に「信ちゃん？」・・・って何？

いやいや・・・奥の子って誰・・・？

「店長、例の霊媒師のおばあさん事なんですけど・・・」

「ん・・・？」

「なんか上手くいかなかったみたいで・・・」

「あ～あの人ね」

「ええ・・・それで今度は店長も同席して欲しいって・・・」

「いいけど・・・そんなに厄介な霊なのかしら？」

「なんでも戦国時代の霊が地縛霊に憑依しているらしくてかなり強い邪悪な霊だと言っていました」

「ふ～ん・・・で・・・誰・・・？」

「さ～名前までは名乗らなかったらしいんです。」

「ま～いいわ！それじゃ今から行くからって連絡してみてください？」

「はい・・・直接現場に行きます？」

「その方が早いわね」

「分かりました・・・それじゃ今連絡してみます」

そういうとスタッフは奥の部屋の方へ歩いて行った。

「今から行くって何しに行くの？」

「除霊なんだけど・・・ま～あのばあさんの除霊も適当だから・・・」

「適当って霊能力とかってもってない人なの？」

「一応はあるわよ！あれでも本物の霊能力者だから・・・」

「それじゃ～除霊をする相手の霊ってヤバイって事じゃないの？」

「ま～ね！いかに本物の霊能力者とはいっても所詮は人間だからね」



「はい・・・？」

「それにちょっと気になる事もあるし・・・」

「気になる事？」

「ちょうどいいから、あんたも一緒に来なさいな！」

「え・・・？」

さっきのスタッフが戻って来た。

「妙さんも今から向かうそうです」

「そう・・・」

「それからこれがその家の住所と地図です」

「ありがと・・・それじゃ行ってくるわね」

「はい・・・お気を付けて行ってらっしゃませ」

私と父親がお店を出ようとする時、信長の霊が奥の方から聞いてきた。

「な～・・・ついでだからこいつも連れて行くか？」

「そうね・・・」

「こいつもって・・・誰・・・？」

「ん・・・？市よ！市！」

「はい・・・？」

「怖いわよ～市は・・・」

「え・・・？」

「あのネガティブさは半端じゃないからね・・・」

ネガティブ・・・？・・・どういふ事・・・？

「ね～さっきいたお店の女の人にもあんたの事が見えてるの？」

「あ～・・・あついの事か？」

「あいつって・・・かりにも女性にたいして失礼じゃないの？」

信長の霊がいきなり笑い出してしまった・・・

それにつられて父親である奈緒までが笑い出す始末なのである。

「ちょっと！なによ？」

「え・・・？」

「二人して、なにがそんなに可笑しいわけ？」

「何がって・・・な～奈緒・・・」

「あはは！」

「ちょっと！ちょっと！ちゃんと説明くらいしなさいよ！」

「あはは！あいつは女じゃなくて男なんだぜ」

「はい・・・？」

なに？

男・・・？

男って・・・それじゃオカマ友達かなんかなの？

それにしてもどこから見ても女の人にはしか見ええなかったけどな～

「男ってどういうことなの？」

「ってか、たろべ～のやつ今日はいなかったけど、あいつどこってんだ？」

「さ～知らないけどこの前言ってたじゃない？」

「そういえば、なんだか気になる事があるとかって言ってたっけな」

「ちょっと、勝手に話を進めないでよね」

「あはは！悪い悪い・・・」

「で、どうしてさっきの人が男なのよ？」

「さっきのは女だよ！」

後部座席で答えた信長の霊がいきなり隠れてしまった・・・

「彩奈ちゃん・・・お願い・・・その手に持った缶コーヒーを置いて欲しいけど・・・」

そういえば一緒に乗ってきたお市さんの幽霊はどこにいるのかしら？

彩奈はそう思って後部座席の方を覗いてみると

運転席の後部座席の方でうずくまって一人でなにかブツブツひとり言を言っているのだ

「ね～お市さんどこか気分でも悪いの？」

「おいおい・・・いいからほっとけて・・・」

「だって・・・」

「いつもの事だから気にしなくてもいいんだよ」

「そんな事言ったらどこか具合が悪かったら大変でしょ？」

しかし・・・改めて見るとお市さんってとっても綺麗な人だな～と彩奈は思った。

お店にいたときは見えたり見えなかつたりって感じだったからあまり気にはしなかったのだが長いストレートの黒髪に色白の肌、整った顔立ちで少し細い感じに思える。

黒のロングのワンピースが細い体をより魅力的に映し出していた。

そんなお市をじっと見つめている彩奈に気がついたお市が伏せていた顔をあげて彩奈を見つけた

「長政様はわたくしの事をお許しにはならないかもしれない・・・」

「え・・・？」

「私は悪い女・・・長政様を見捨ててひとり逃げ出してしまった悪い女なの・・・」

「はい・・・？」

「わたくしなんて死んでしまった方がいいの・・・」

「お前はもう死んでるだろうが・・・」

「いいえ・・・わたくしの魂がまだ生きてる事が悲しいんです・・・」

「ってか、お前は長政の事を知らね～だろうが！」

「あああ・・・勝家様はいま何処へ・・・」

「だから！お前は勝家とも長政とも一緒になってね～だろ！まったくもう！」

「そんな・・・父上はわたくしの事がお嫌いなのですね・・・」

「いいから黙って座ってろ！」

ちょっと待って待って・・・

なに・・・？

お市さんて長政と勝家の二人に嫁いだんじゃないっけ・・・？

いや・・・その前にさっきの店員の女性の事が先だわ

「だから、どうしてさっきの人が女なわけよ、さっき男だって言ってたじゃないの？」

「あはは！・・・そういうことか・・・」

「だからどういう事なわけ？」

「あいつは光秀のたるべ～の趣味なんだよ」

「はい・・・？」

「たろべ～って女装が趣味だったんだぜ？知らなかっただろ？あはは！」

「どういう事・・・？」

「あの子の魂を食ったから普段はあの子と同化してるんだよ」

「同化・・・？」

「ああ・・・普通は同化じゃないんだけど・・・あのバカは同化すると女性の格好で居られるからってさ」

「だってさっきの人は普通に女性の言葉使ってたし違和感もなかったわよ？」

「うん、さっきは同化してなかったからな」

「同化してなかったって・・・どこかに行ってるの？」

「たろべ～は基本的に忍者だからな！隠密行動が好きなんだよ」

「忍者・・・？武士じゃなかったの？」

「俺に拾われてから武士になったんだ、それまでは忍者だったんだよ」

「うそ・・・？」

「うそじゃないよ！なにせ俺の命を狙ってたんだからな！」

「マジで・・・？」

「ってか、たろべ～の場合は一人隠密に萌えてるからだけど」

信長の霊と話をしていると何がなんだかだんだん分からなくなっていくので  
彩奈は深く考える事をやめることにしたのだ。

自分が今まで得てきた知識と比較するからわけがわからなくなってしまうのだから

これはこれで別のものとして考えた方がいいのではないかと思ったのである。

「市、とりあえず彩奈ちゃんに食われてみるか？」

「ちょっと！食われてみるってどういう事よ？」

「彩奈ちゃんは奈緒と似てるから食われるよりも食った方がいいと思うんだ」

「だからその食うとか食われるとかってなんなの？」

「人に魂を食われたり、人の魂を食ったりっていうのは幽霊同士とはちょっと違ってるんだよ」

「どう違うわけ？」

「幽霊同士だと食った方が主導権を握るけど相手が人間の場合は食っても食われても主導権は人間の方にあるんだよ」

「ふ～ん・・・じゃ～どこが違うの？」

「例へば霊魂どうしの戦いとか争いとかになった時にどっちが主導権を握るかって事かな？」

「う～ん・・・」

「今流に言うとオートドライブかマニュアルかって事だな  
いざ戦いになった時に霊魂の方が主導権を握って戦うのかそれとも人間の方が主導権を持つ  
のかって感じだよ」

「それじゃ～あんたはどうなの？」

「俺か？俺は奈緒に食われてるから戦闘の時は奈緒に従って戦う事になるんだ」

「ってか、その戦闘とか戦うとかってなに？」

「霊魂の世界にも色々あってな、今は第二次世界大戦の亡霊どもかな？」

「前に言ってた事ね？」

「ああ・・・そうなんだ」



「その亡霊たちが何かしようとしてるって事？」

「まだハッキリとは分からないんだけど原爆を落とした国に復讐をしようとしてるらしいんだ」

「そんな事言ったってどうやってそんな事が出来るわけ？」

「今の日本の政府を乗っ取るんだよ」

「乗っ取る？」

「政府の要人の一人二人乗っ取ったってそいつらが変な行動をすればすぐにバレるだろ？」

「うん・・・」

「だから政府の内閣を全て乗っ取る気じゃないかな？」

「まさか・・・？」

「どうやら、まさかではないらしいんだよ」

「でも今の日本のどこにそんな戦闘力があるの？」

「あるよ、日本には米軍の基地が、それを占拠しちまえばいいわけだろ？」

「でも、なんかそれって変よね？」

「ん？どこがだ？」

「だって普通は日本を乗っ取って自分たちの国にするとか日本を破壊するとかってなるんじゃないの？」

「それは霊魂が主導権を握っていればそうなるだとうけど、奴らは亡霊どもの集合体だから復讐しか考えてないんだよ、復讐しなけりゃ死んでも死にきれないって思ってる奴らだからな！」

「でも、それだったら簡単に政府の人たちみんなに乗り憑れるんじゃないの？」

「そうはいかないよ、他の霊魂たちがそれを阻止するから」

「他の靈魂たち？」

「ああ・・・俺の方は勝家のハゲたちが見張ってるぜ」

「ああ～勝家様・・・申し訳ありません・・・」

勝家という言葉に反応したらしくお市は突然声をあげた・・・。

「いいから、お前は黙ってる！」

「そろそろ着くから彩奈に市を食わせちゃってよ！」

「そうだな、よし分かった！」

「よし分かったって、何？お市さんを鍋にでも入れて煮込むわけ？」

「あはは！奈緒、もしかしたら彩奈ちゃんは奈緒以上になるかもよ？」

「あら、ばあさんの方はもう来てみたいね」

目的地の住宅に着くともう霊媒師の妙さんの車が止まっていたので少し離れた所に車を止める事にした。

「どうして霊媒師さんの車から離れた所に止めるの？」

「ばあさんの乗ってきた車の中をよく見てみろ！」

彩奈は霊媒師の乗ってきた車の中をガラス越しにじっと見つめているとさっきは見えていなかった何かが少しずつ浮かび上がってきた。

「あれで霊媒師やってんだから、ホント適当なばあさんよね」

「ちょっとあれって・・・もしかして？」

「あんたにも見えるでしょ？」

「うん・・・知らない2人が後部座席に座ってるみたい・・・」

「除霊する霊媒師が幽霊に取り憑かれてるんだから、まるでマンガみたい！」

「どうして取り憑かれてるのに気がつかないの？」

「それが人間の限界なのよ」

「そういえばさっきもそんな事を言ってたけどどういう事？」

「どうって、言葉の通りよ」

「なに？お父さんは人間じゃないの？」

「さっ・・・降りるわよ！」

「ちょっとまだ話が終わってないでしょ～が？」

「え・・・？なに？」

このオヤジだけは・・・

あの話の流れからママという言葉がお父さんという言葉に変わった事に気がつくなんて

そうじゃなくてもどこの世界に自分の父親をママって呼ぶ習慣があるっていうの？

いや・・・その前になんで女性になってしまったわけ？

というより・・・そこのこだわりってそんなにこだわらないとダメ？

ママと呼ばれる父親よりも自分の父親をママと呼ぶ私の方が変態扱いされるのと違う？

とはいえ・・・この頑固オヤジのこだわりに関わっていると話が先に進まないのよね・・・もう～

「だからママは人間じゃないの？」

「人間よ・・・」

「あああ===！もう！話が進まないでしょ===が！」

「あはは！あんたも市を食うと分かるから心配いらないわよ」

「だからどうやって食べるのよ！」

「今に分かるから・・・市！降りるぞ！」

「あれ？そういえば信長の霊は？」

「もう行ったわよ」

「行ったって・・・何処へ？」

「ほらあそこ！ばあさんの乗ってきた車のところ」

「あっ・・・何してんのあいつ？」

「食う価値があるかないかってことだろ？」

「食べる相手に価値があるとかないとかってあるの？」

「うん、あるわよ、あいつは数では1805の霊魂の集まりだけど力関係で言えば5000は軽く超えるのよ」

「うそ・・・？それじゃ信長の幽霊ってメチャクチャ強いんじゃないの？」

「1対1であいつに勝てる奴は滅多にいないわよ・・・」

「滅多になって・・・それじゃ信長の幽霊が一番強いってわけじゃないの？」

「あいつが一番強かったら本能寺の前に死ななかつたわよ」

「それって原因不明の病気で死んだんじゃないの？」

「だから原因不明の病気なのよ」

「どういう事・・・？」

「あいつにもはっきりとは分からないらしいんだけどね、気がついたら魂の世界にいたらしいわ」

「魂の世界・・・？」

「ま～霊界って事ね、あいつは霊界の事をリアルってよんでるみたいだけど」

「霊界にもちゃんと名前があるんだ？」

「そうみたいよ・・・それじゃ降りるわよ」

二人と霊であるお市が車から降りると信長の霊が戻ってきた。

「どうだった？」

「ありゃただの低級霊だわ！」

「ふ～ん・・・」

「とりあえずあの霊媒師のばあさんのボディガードくらいは出来るだろうから少し脅かしてやっ

たぜ」

「あはは！」

「脅かしたって・・・なんて言って脅かしたのよ？」

「レッド・リアルに飛ばすぞ！って言ったら命をかけて霊媒師を守りますって言ってたぜ」

「レッド・リアル・・・？」

「ああ・・・俺の命を奪った奴らのいる世界だ！」

「え・・・？」

「そのうち彩奈ちゃんにも分かるから大丈夫だよ」

「それじゃ彩奈に市を食べさせちゃってくれる？」

「おう！分かった。それじゃ市、こっちに来い！」

「え・・・？どうすんの？」

「彩奈ちゃんは左手を差し出して左手を市の頭の上に置いてみて」

「左手を・・・？それで食べれるの・・・？」

「ああ・・・でも誰でも魂を食べるわけじゃないんだ、だから最初にそれを試してみるから」

彩奈は信長の霊に言われたようにお市の頭の上に左手を乗せてみた。

するとお市の体が金色に輝き出したのである。

次の瞬間、その金色に輝き出したお市の光が彩奈の左手の中に吸い込まれていった。

「どう？彩奈ちゃん？」

「どうって・・・別に何も起きないわよ？」

「それじゃ～成功だ！」

「成功って？」

「うん、もし失敗してたら彩奈ちゃんは今頃・・・」

「今頃・・・？」

「ちょっと彩奈ちゃん？いつ缶コーヒー持ってきたの？」

「え・・・？」

「いま何かしようとしたら？」

「え・・・？何かって・・・？」

「俺に何か投げつけようって思わなかったか？」

「うん・・・ちょっと思った・・・」

「やっぱり・・・」

「それとこの缶コーヒーとどう関係があるわけ？」

「それが市の能力なんだよ」

「お市さんの・・・？」

「ああ・・・でも市の能力はそんなもんじゃないからだけどな・・・」

「どういう事よ？」

「俺が説明するより彩奈ちゃんの中の感覚が彩奈ちゃんに教えてくれるから」

「教えてくれるってのは？」

「今に分かるよ、同化には少し時間がかかるからそれまでは自然体でいるといいぜ！」

「ふ～ん・・・ってかお市さんはどこいったの？」

「彩奈ちゃんの中だよ」

「うそ・・・？だって何も感じないわよ？」

「そりゃそうだよ、感覚で認識出来るようになるまでにはまだまだ時間がかかるよ」

「どれくらいかかるの？」

「同化した人によるけど何日か何週間かそれとも何年もかかる場合もあるし」

「え～何年もかかるの？」

「でも彩奈ちゃんの場合はけっこう早いかもしれないな」

「どうして？」

「だってもうお市の能力を使っただろ？」

「使ったって・・・この缶コーヒーの事？」

「うん、そうだよ！」

「でもこの能力って何か役に立つの？」

「う～ん・・・それじゃ市の能力の正体を教えるけど・・・俺に攻撃しようなんて考えないでくれよな」

「どうして・・・？」



「その缶コーヒー・・・」

「この缶コーヒーがどうしたの？」

「だって俺に当たるじゃないかよ！」

「あはは！そうか！うん分かった、大丈夫投げないから安心して！」

「ホント？」

彩奈は少し可笑しかった・・・

信長ほどの霊魂が彩奈が手にしている缶コーヒーを  
自分に投げつけられるじゃないかと気にしてるのだから・・・

「ホントだってば！それでお市さんの能力の正体って？」

「うん・・・お市の持っている能力って言うのは人間界で言う死神みたいなもんなんだ」

「死神・・・？」

「ああ・・・俺らのいるリアルの世界でもかなり貴重な能力なんだぜ」

「そんなにすごい能力なの・・・死神の能力って？」

「彩奈ちゃんがさっき使った能力は行一定範囲のモノを瞬間移動出来る能力なんだぜ」

「それがそんなにスゴイ事なの？」

「う～ん・・・人間界で言うなら反重力って事かな？」

「反重力？」

「俺たちがある一定範囲を瞬間的に移動出来るのはその反重力を使うからなんだけど  
市の場合はその反重力の発生させる起点を自由に作れるってところなんだよ」

「起点を自由に作れる？」

「ああ・・・俺たちは自分が移動したいと思う場所に起点を作ってそこまで飛ぶんだけど  
その起点になる重力の強さを調整出来るから早く移動したり突然消えたりするように見えるんだ

普通は自分対起点の直線の中での移動になるんだ。」

「ふむふむ・・・」

「ところが市の場合は自分の手とか足とか、どこにでも自分の中にその起点を作れてしまうんだよ

それだけじゃなくて起点を一度に何個も作れてしまうんだ」

「それで缶コーヒーが私の手に突然来たんだ？」

「ああ・・・彩奈ちゃんの記憶にあるもモノなら何でも出来ちゃうぜ」

「なんでもって・・・？」

「なんでもだよ」

「それじゃそこの自動車とかも？」

「簡単な事さ」

「それじゃさ～そこのビルもって事？」

「ああ・・・出来るぜ」

「でも、それって全部私の所に来るって事？」

「違うよ、そこのビルをあっちの山の上にだって移動できるし少しの間なら空中にだって静止も出来るぜ」

「うそ・・・？それってとってもスゴイんじゃない？」

「うん、それだけでもかなりスゴイ能力なんだけど市の能力からしたらそんなのはまだ序の口だぜ」

「はい・・・？」

「ま～市と同化していけばそのうち分かってくるから気にしなさんな！」

「で・・・お市さんにはいつ会えるの？」

「会おうと思えばいつでも会えるぜ・・・ただ今はまだ無理だけどな」

「そっか・・・」

「そろそろ行くわよ！」

奈緒と彩奈は霊媒師の妙さんが待つ家の中へと入っていった。

家の中に入るとリビングには霊媒師の妙さんと他に3人程の姿が見えた。

ここの住人であろうか？

両親とその娘さんのようである。

両親と思われる二人は60ちょっと前くらいだろうか？

小ざっぱりとした感じで一般的に言うところに中流階級といった感じである。

娘さんの方は20代前半くらいだろうか・・・

少し長めの髪にウェーブがかかっている感じで清楚な顔立ちの綺麗なお嬢さんといった感じである。

「おお・・・奈緒ちゃん」

「そこのお嬢さんかい？」

「うんだ・・・このお嬢さんに取り憑いてるだがや・・・」

ご両親とお嬢さんに軽く挨拶をしてから二人はリビングへと入っていった。

「それじゃ今から取り憑いてる悪霊を呼び出すけど奈緒ちゃん準備はいいかい？」

「いいわよ別にそんな事をしなくても・・・」

「ほうかい？」

「ええ・・・ちょっと引っ張り出しちゃうからばあさんはそこでお茶でも飲んでてよ」

そう言うと奈緒は霊に取り憑かれているお嬢さんの前にテーブルをはさんで座った。  
その時、奈緒の横に居る彩奈が何やらひとり言のようにつぶやいた・・・

「なんでこいつが取り憑いてるのよ？」

「はい・・・？」

奈緒はびっくりして彩奈の方を見上げた・・・。

「おい信長！ヤバイぞ！急いで市を抑えろ！」

奈緒の言葉に信長の霊魂が慌ててお市を制止させるために霊術をかけようと思ったとき

「あんた！私の召使の分際で勝手な事をしてんじゃないわよ！」

「はい・・・？」

「召使・・・？」

奈緒と信長の霊魂がお互いに顔を見合わせた・・・。

彩奈が突然お市に対して怒鳴ったのだが・・・

霊媒師の妙さんやこの家庭の住人には奈緒が発狂でもしたかのように映ったのである。

「召使・・・プププ・・・」

「召使って・・・あはは！」

「なに？・・・なによ二人して何笑ってんのよ？」

「いや・・・普通は奴隷とかパートナーとかって言うもんじゃないのか？」

「え・・・？そうなの？」

「見てみなさいな！思わず市まで固まってしまったじゃない！」

「え・・・？私って今・・・お市さんに何か悪い事を言ったの？」

「いや・・・それより驚いたな～こりゃまいったわ！」

「なにがよ・・・？」

「何がって・・・市の暴走を止めたのは彩奈rちゃんが初めてだぜ！」

「暴走・・・？」

「ああ・・・市の暴走を止めることなんて今まで誰にも出来なかったんだぜ」

「はい・・・？」

「だからいままで誰も市と同化出来なかったから市はいつも一人だったんだけど・・・こりゃまいったわ」

「うそ・・・？」

「ホントさ！今まで市と同化した奴はみんな市の暴走を止めれなくて逆に市に食われちゃったんだぜ」

「ふ～ん・・・」

「彩奈ちゃん！湯呑！湯呑！」

「え・・・？」

彩奈が自分の右手を見たらテーブルにあったはずの湯呑の茶碗をいつの間にか手に持っていたのである。

「あ・・・ごめんごめん・・・」

「しかしホント驚いたな・・・市が彩奈ちゃんを認めたみたいだなこりゃ・・・」

彩奈の手にしている湯呑を奈緒が受け取った途端に彩奈が意識を失ってしまった。倒れこむ彩奈をお市が優しく支えながら彩奈をソファへ寝かしてあげるのだった。

奈緒はソファに横になって眠る彩奈からテーブルの反対側に座っているお嬢さんの方へ視線を移すと

「なんであんたがここにいるの？」

「覚えてたのかい？」

「忘れてたわよ！」

「おいおい・・・そりゃ～ね～だろ？」

「あはは！冗談よ！」

「こいつに取り憑いてる霊は見えてるな？」

「ええ・・・」

「それじゃ・・・その奥に潜んでるもう一匹の奴に気をつけな！」

そう言うとき・・・その霊魂はフッと消えていったのである・・・。

「信長・・・いけるか？」

「ああ・・・大丈夫だ！」

「市！ご両親とばあさんに結界を頼む！」

お市は奈緒の言葉に反応するようにリビングに居る両親と除霊師の妙さんの周りに結界を張った。

「市！俺が取り憑いてる霊を一度飛ばすからそのまま保護してろ！」

「はい・・・！」

そう言うとき信長の霊魂がお嬢さんに左手を開いて差し出した。

次の瞬間、薄いピンク色の霧の塊が左側に飛んだ！

それをお市は金色のベールで包み込んでいく。

「出てきなよ！出てこなきゃ引きずり出すわよ！」

奈緒の言葉に反応するように薄ぐろい物体がお嬢さんの背中からその姿を現した。

「あんた・・・関東の亡霊の仲間ね？」

「ふん・・・なんで分かった？」

「その前になに武士の格好なんかしてるわけ？ちょっとダサいわよ！それ？」

「え・・・？」

「ってか・・・それって誰？」

「いや・・・一応・・・信玄公のつもりだけど・・・」

「あはは！あんたバッカじゃない？」

「なんだと・・・？」

「なめた口を聞いてんじゃないわよ！その程度の霊力で・・・このタコが！」

「てめえの霊力もたいしたことないだろうが・・・？」

奈緒が左の小指を弾いた・・・

途端・・・奈緒の霊力がさっきとは比べ物にならない程に上がっていく・・・

「まだ小指一本だけど・・・どう？お気に召したかしら？」

取り憑いてた靈魂は途端に急上昇した奈緒の霊力にみるみるうちに青ざめていく・・・。

「このままあんたを引き裂いてやってもいいんだけど・・・引き裂かれたらあんたの靈魂がどうなるかしら？」

「待て・・・ちょっと待ってくれ・・・」

奈緒の霊力を目の当たりにした靈魂が低姿勢で奈緒の方を見つめていたのだがカバンからタバコを取り出そうとし始めた奈緒にニヤリとすると途端に自分の霊力を上げて奈緒に斬りかかってきた！その霊力はいま奈緒が上げてみせた霊力をはるかに上回っていたのである。

「アホとちゃう？」

奈緒がポツリとひとり言をつぶやいた瞬間

奈緒に向かって斬りかかってきた靈魂を信長の一太刀が襲った・・・

そして斬りかかってきた靈魂が八方に引き裂かれて消えていった・・・。



「だから言ったのに・・・小指よって？」

「こいつ・・・ベルベット・リアルの霊魂だぜ？」

「そうみたいね・・・」

「関東の亡霊どもに力を貸してるってことか？」

「おそらくね・・・コアを持たないくせに妙に統率されてるからおかしいと思ってたのよ」

「そのうち明智のたるべ～が何か掴んでくりゃいいが・・・」

「あはは！ダメダメ！あいつは一人隠密に萌えてるから！」

「それじゃ～どうすんだよ？」

「ま～それは後に回して、いまはこのお嬢さんの方ね」

「そうだな・・・市！戻してくれや！」

「はい・・・」

お市は金色のベールで包み込んでいた霊魂を気絶しているお嬢さんに戻してあげると  
霊媒師たちに張っていた結界を解いた・・・。

「あなた・・・このお嬢さんのお姉さんね・・・？」

奈緒の言葉に反応するかのようにお嬢さんに取り憑いてる幽霊が姿を見せるのであった・・・。